

教育の広場

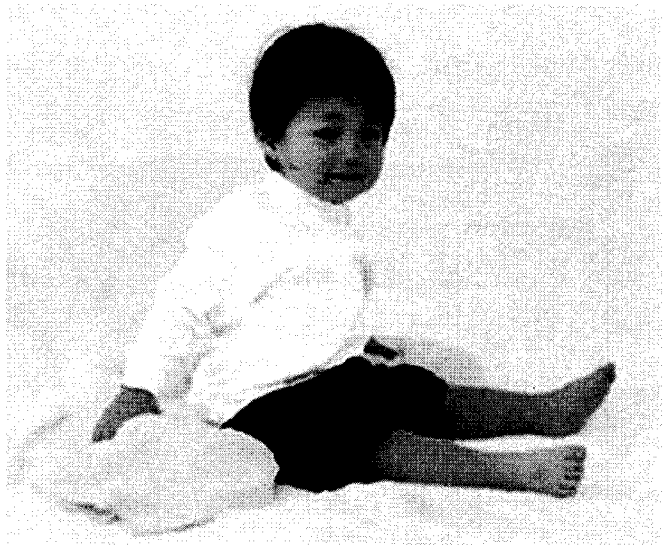
池田知隆

赤ちゃんとは絵本を楽しもう ブックスタート運動、10年の歩み



ブックスタートは1992年に
英国で始まりました

「赤ちゃんといっしょに絵本を楽しもう」。
赤ちゃんの体の成長に母乳やミルクが必要な
ように、赤ちゃんのことばと心を育むために
は、抱っこという母と子の温かいぬくもりの
中で、優しく語りかける時間が大切だ。その
かけがえないひとときに絵本を楽しんでも
らおうというブックスタート運動が静かに広
がっている。2000年に東京杉並区で試験
的に実施され、昨年12月末までには実施自治
体が684市区町村となり、全国の市区町村
数(1805)の三分の一を超えた。子ども
の育て方や親子関係のあり方は、それぞれの
家庭の問題ではなく、地域や社会の課題でも
ある。人間の成長を温かく見守っているその
ブックスタートの現状と課題を考えたい。



語りかけは不可欠な栄養素

赤ちゃんは、母親とのぬくもりと語りかけを通して、自分が愛されていること、守られていること、大切な存在であることを体感する。そしてことばを呼応させる経験を積み重ね、人を信頼することを知り、自分以外の人と気持ちを通わせる力を育む。親の肌のぬくもり、やさしい語りかけは赤ちゃんの発育に不可欠な栄養素だ。

また周りの大人にとっても、赤ちゃん

と向かい合うひとときは、心安らぐ楽しい時間になる。そのひとときを絵本を紹介して持つてもらうというのがブックスタートだ。具体的には、地域の保健所、健康増進センターで行われる0歳児検診の機会に、すべての赤ちゃんと保護者にそんなメッセージを伝えながらブックスタート・バックを手渡している。そのバックの中には、赤ちゃんにおすすめの絵本、赤ちゃんの絵本を楽しむためのイラスト、アドバイス集、おすすめの本リスト、コットンバッグ、よだれかけ、子育て支援の情報、図書館利用登録用紙などが入っている。

赤ちゃんは絵本を自分で読むことができな。だけど、親が読んであげることによって絵本を楽しむことができる。0歳児から絵本を媒体とした親子の触れ合いの時間を習慣として持つことは、子どもの情緒面、言語面、思考能力等の発達に大きく関与することがすでに明らかになっている。

英国から始まった

このブックスタートは1992年、英国で始まった。教育基金団体「ブック・トラスト」が、英国第二の都市、バーミンガム市行政機関の協力で地元の中央図書館、保健局、大学教育学部と連携し、300家庭を対象に試験的に実施した。

バーミンガム大学の調査によって、ブックスタート・バックを受け取った家庭では、より深く本の時間を楽しむようになったこと、赤ちゃんのころから本を楽しむ時間を習慣として持つては、その子の言語面や計数面の考える力に大きな影響を与えたことなどが報告されている。

この運動の背景には、英国での移民の増加によって識字率の低下という大きな社会問題があった。読み書きの力を培うという効果とはつきりと現れ、現在では英国の90%以上の自治体で実施されている。

日本では2000年「子ども読書年」を機に、「子ども読書年」推進会議がそ

海の恵み にがりを残した

はかた
伯方の塩®

※**伯方の塩**®は、自然の風と太陽熱で蒸発結晶させたメキシコの天日塩田塩を日本の海水で溶かして原料とし、CO₂の排出を少なくしています。



はかた
伯方塩業株式会社

〒790-0813 愛媛県松山市董町4丁目-4-9
TEL089-911-4140(代) FAX089-923-9671
ホームページ <http://www.hakatanoshio.co.jp/>



の導入を呼びかけ、同年11月に東京都杉並区の協力を得て試験的に実施された。その反響は大きく、翌2001年4月には全国21の市町村自治体で本格的に始まった。

それに伴って、長期的に全国各地の運動をサポートするため中立的な立場の特定非営利法人「ブックスタート支援センター」も発足。その理念を正確に伝えるワークショップの開催、各地域の運動を結ぶネットワークの構築、ワークショップやシンポジウムの開催、出版界の支援による質の高いブックスタート・パックの制作と供給などに取り組んできた。

2004年2月に組織名称を「NPOブックスタート」(特定非営利活動法人ブックスタート)に変更した。

「保健所文庫」の試みから

ブックスタートが実を結んでいくかどうかは、なによりも保健師や地元の住民の下からの盛り上がりにかかっている。赤ちゃんが検診で必ず通う保健所は、地域で暮らす同じ世代の子どもたちと親たちを知り合うことのできる貴重な場だ。そこは単に妊産婦に絵本を渡すところではなく、妊産婦や乳幼児を持つ保護者にとって、読み聞かせや絵本に触れる最初の公共施設でもある。

その機会をとらえて子育てをめぐる語



り合いをどう広げていくのか。すべてはそこから始まる。

かつて東京都練馬区にある「保健所文庫」を訪ねたことがある。「絵本を通して赤ちゃんとのふれあいを」と、練馬区にある6保健所・保健相談所のすべてに文庫が置かれていた。

密室の中で乳幼児と向き合い、周囲から孤立しがちな母親たちを、絵本を通してつないでいこうと、地域で「家庭文庫」

の活動をしてきた人たちが支援していた。真新しい高層住宅が林立する練馬区の光が丘地区。

地下鉄光が丘駅近くにある光が丘保健相談所では月4回、絵本選びや読み聞かせなどを行う「かんがるー文庫」や布の絵本づくりを楽しむ集まりが開かれていた。自分で好きな本を選び、お母さんに読んでもらってうれしそうなお母さんたち。人気の絵本にはたくさんのお母さんたちの歯

荒れて弱った胃粘膜を修復する 新キヤベジン[®] S

効能／胃重、もたれ、むかつき、胃痛、胃弱 医薬品



C-807

Kowa 製造元 興和株式会社 販売元 興和新薬株式会社
(製品情報) <http://hc.kowa.co.jp>





形がついている。

じゅうたんが敷かれたその「絵本の部屋」に集まってきたお母さんたちは、子育て談義をにぎやかに繰り広げていた。

「ここでは本の話だけに限らず、子育てのことなら何でも気軽に話せます」。文庫代表の大江教子さんは、長女が生後3か月のころから通い始め、2人目の長男を抱きながら話っていた。

「近所に住んでいても、どんな人なのかかわからず、仲間づくりが難しい。保健所に育児の悩みを語り合える場があるのはとても心強く思っています」

密室に風穴を

「高層住宅で育児をしているお母さんはあまり外出しませんし、人づきあいためのきっかけ作りが下手ですね」

保健婦の塚越典子さんはしみじみとそう語った。

家庭訪問すると、若いお母さんから「よその家を訪ねるときには週何回ぐらい、時間はどのくらいで、玄関の戸からどのくらいまで入ったらいいの」という相談をよく受けるという。

1歳10か月の幼児を連れて来ていた30歳の母親も言う。「だって私たちがこれまで受けてきた教育では、与えられるばかりで、自ら働きかけて何か作り出す経験をしていませんから。いつも周囲を気



遣い、他人と交流していくのが苦手なんです」

核家族化や高層住宅での暮らしが広がり、多くの母親がカプセルのような室内で一日中、乳幼児と向き合っている。テレビや雑誌でたくさんのお育児情報に接しても、直接悩みを相談できる友だちはなかなか得られない。そしてストレスがたまって幼児虐待という深刻な問題にもつながりかねない。塚越さんは言う。

「孤立しているお母さんの仲間作りは今や保健所の責任として取り組まなくてはなりません。保健所は親子が必ず通る場所ですから」

保健所の母子事業として妊娠中の母親学級、出生後の3か月児、1歳半児、3歳児の3回の検診がある。しかし、これらの検診による疾病や問題の早期発見、早期対応という活動では解決できないことが多く、母親たちの相互交流の場が求められてきた。

この保健相談所では乳幼児検診後、母親たちに「絵本の部屋」を案内している。そこでお母さんたちが絵本を手にしながら、育児の悩みを語り合える友だちをつくってもらおうというのだ。検診に訪れた母子のうち約半数がこの部屋に立ち寄っていた。

「ほんのちょっとしたきっかけで、お母さんたちは急速に親しくなりますよ。」

ここでは親子が主人公で、子供が泣いても、寝ていても、はしゃいでいても、授乳していても、気にせずが集まれる場所です」と塚越さん。保健所文庫は育児で悩むお母さんの心のオアシスになっていた。

赤ちゃんが選ぶ本を

「子供にはどんな本をすすめたらいいでしょか」

この部屋に初めて来たお母さんに聞かれたとき、文庫の世話をしている渡辺順子さんは「子供たちに聞いてみたら」と答えている。

「子供たちは文庫の中から自分で興味のある本を探してきますよ」

渡辺さんは1973年から自宅に「すずらん文庫」を開設した。「すべての子供たちに読書の喜びを」との願いから障害をもつ子たちにも文庫の輪を広げ、言葉や手指の機能を促す「布の絵本」づくりを始めた。さらに育児ノイローゼの母親たちが増加し、保健婦さんが訪問しきれない状況にあるのを知って、保健所文庫の設置を呼びかけた。80年代初めのことだ。84年に大泉保健相談所内に絵本の本棚が常設され、他の保健所にも文庫が広がっていった。

「0歳児に絵本は無理だ、早すぎる」という声もあるが、渡辺さんは「走り棒高

跳び」を例にこう説明する。

「本来、読み聞かせは3歳前後からです。そこは棒を立てバーを跳ぶ部分です。これは赤ちゃんには無理です。しかし、跳ぶための助走は欠かせない重要な部分で、赤ちゃんは絵本の関係は『助走』にあたるのです。と。絵本を手に親の優しい眼差しと肉声での語りかけこそが、赤ちゃんにとっては「言葉の喜び」の日々であり、人間として育つ第一歩なのです」



「保健所文庫」は第2の実家

保健所で絵本の講座などを開くと、早期教育と勘違いするお母さんが集まってくる。だが、渡辺さんは「文庫は親子の心のふれあいの場で、豊かな情感をはぐくんでほしい」と強調する。

「密室の中で、赤ちゃんにテレビやビ

デオを見させて育て、言葉の発達の遅れた子もいました。赤ちゃんは話しかけられるのが大好きです。まばたきもせずに、じっと話し手を見つめ、体全体で言葉を受けとめる。赤ちゃんのときから、言葉を聞く楽しみを味わった子供たちは言葉の大切さを知って成長していきます」

お母さんたちもうなずきながら付け加えた。「親が絵本を買って子供に差し出しても、子供がそれを手にしなかったらそれっきりで、親子で本離れになってしまふ。この文庫では、子供が自分で好きな絵本を自由に手にして、何度も読めるし、本当に好きな本を買ってあげられます」

この光が丘地区では、出産した母親の約3分の1が、子供が3歳になるまで転居している。しかし今では、引越し先からこの文庫まで通ってくる人もいる。「赤ちゃんにとって、絵本に出合えるこの保健所文庫は、第2の実家」みたいなものです。絵本の楽しさや母親とのふれあいの場をあちこちで広げていってほしい」と渡辺さんは語る。

練馬区のように保健所内に文庫を開いている地域はまだ数少ない。新しい公共図書館の中には、ベビーベッドを用意し、乳幼児サービスに取り組むところも出てきたが、これからの公的な子育て支援の場として「保健所文庫」の役割はもっと

大きくなっていきそうだ。

いま世界で

赤ちゃんに絵本をプレゼントするブックスタートは、保護者が絵本を読んであげるきっかけとなり、読み聞かせは子ども読書の入り口となっている。さらに1歳6か月児、3歳児健診などで、系統的・継続的に保護者に対して絵本の読み聞かせの大切さの理解を深めるため、発達段階に応じた絵本の選び方、絵本の紹介、絵本の読み方のアドバイス、親子対象の読み聞かせの実施が望まれている。だが、乳幼児健診は過密なスケジュールに追われ、絵本のために時間を取れない状況にあるのが現実だ。

また、保健所や健康増進センターの絵本を充実させれば、ふだん図書館に行かない親子も本にふれることができるし、読み聞かせボランティアも不足している。まだまだ課題は山積している。

先進国では、子どもの「読書離れ」と社会問題（家庭崩壊、親子関係の希薄化、子どもの表現力の低下など）との関連が共通して語られている。

出生数が減少し、子育てをめぐって孤立感を深めている母親は少なくない。

次世代の地域社会を担う子どもの成長や教育の環境づくりに私たちはどう責任をもとうとしているのか。ブックスター

トは、そのことを深く問いかけている。いまでは日本のほか、韓国・タイ・台湾をはじめアジア各地にも広がっている。国によって社会的・文化的な背景は異なるが、赤ちゃんの健やかな成長を願う思いは立場や国境を越えている。

日本型ブックスタートとは

ブックスタートはなにも、絵本を普及させる運動ではない。日本の風土、社会に根ざした活動でなければ、広がってはいかない。

「NPOブックスタート」会長の松居直さんはホームページでこう語っている。「全国一律の上から下へ降ろす運動になつては、弊害のほうが多くなる。この運動の成否は、草の根の住民の気持ちをごれくらい汲みとれるかにかかっていいます」

何度も繰り返すまでもなく、いまテレビによる子守り、ビデオ漬け、ゲーム機器、携帯電話、パソコンなど映像・電子メディア時代に生まれ育ってきた子どもたちの「言葉の遅れ」や「活字離れ」が問題になって久しい。「ゲーム脳」による弊害も指摘されている。

子どもたちにとっての「絵本時代」は、親や祖父母と子どもたちが心のふれあいをたっぷり満たすことのできるチャンスだ。

やがて一人で読書をするための、大事な土壌づくりの時でもある。なによりも豊かな心と、家族の絆がしっかりと育つ。そのホームページにはこんなメッセージもあった。

言葉の世界そのものである絵本に、「お幸せに！」という思いと言葉を添えて手渡し、共に生きることを願うものです。それと同時に、「ブックスタート」で初めて赤ちゃんが手にした絵本は、必ず保存しておいてください。そしてその子が成長したいつか、例えば結婚式といった適当なときに、手渡してあげてください。それはお母さんの匂いのする、赤ちゃんのときの匂いのする出生証明で、「へソの緒」のようなものです。

その子の確かなルーツであり、一生の記念となるかけがえない絵本なのです。

あせらず、背伸びせず、子どもたちといっしょに絵本の世界を楽しみたい。ブックスタートに寄せるいろんな人の思いをたどるうちに、そんなやさしい気持ちがよくがえってきた。子どもたちから「もっと読んで！」といわれたら、やはりうれしい。未知への好奇心に目を輝かせる子どもたちの姿にはなによりも希望が感じられるからだ。

●赤ちゃんと絵本を楽しもう
ブックスタート運動・10年の歩み

4

NEWS ROTARY

●深刻さ増す製造派遣の「2009年問題」
自殺者増加や治安にも暗い影

12

2009

3

CONTENTS

REGULARS

水素社会のさきがけ —家庭用燃料電池から始まるハイブリッドライフ—	20
現代人の健康管理に活用したい健康オイル	24
健康とヨーグルト	28
本誌1月号でご紹介した明方ハム、もう召し上がりましたか？	32
現代人の歯の健康づくり	54
女性ホルモンの神秘と効用	33
医療事情のウラオモテ	34
あのときこんなこと	39
回虫博士の世界漫遊紀行	46
どれみの鼻歌	48
なまずのひとりごと	51
たかが われらが日々？	56
獣医師は、なぜ、動物の言葉がわかるの？	60
どこで憩うか—温泉—奥飛騨温泉巡り	61
食と健康—内臓脂肪 つきやすいメニュー つきにくいメニュー—	65
リビング特集—ペットと暮らす家②	68
LIBRARY	71
3月の運勢	75
編集後記	76

表紙写真 森村 進

